

〔遺伝資源の収集・評価・保存〕
無加温ハウス栽培におけるカラーピーマンの栽植方法

田邊範子・澁澤英城・沼尻勝人
(園芸部)

【要 約】 消費が拡大しているカラーピーマンの無加温ハウスにおける栽植密度と仕立て法について検討した結果、栽植方法としては株間 30cm、主枝 4 本仕立てで高収量が得られ、適当な植え付け方法である。

【目 的】

カラーピーマンは、彩りが明るく単価が高いことから、直売での導入が期待できる品目である。昨年はハウス栽培での収量性について、直売では経営的に有益な作目と評価できた。そこで本年はより多収を目指し栽植密度と仕立て法について明らかにする。

【方 法】

品種は‘フルーピーレッド’を用いた。播種はプラグミックス培地(マイクロロング 6g/L 混合)を充填した 128 穴セルトレイに 2 月 3 日に行い、3 月 1 日に鉢上げを行った。定植は 4 月 28 日に条間 140cm、株間 30cm で行い、定植後はタフベル#3800N によるトンネル被覆を行い、5 月 17 日に除去した。基肥にはロング 424 の 180 日タイプと単肥を用い、成分量(kg/10a)で N : 25, P₂O₅ : 20, K₂O : 20 を全量基肥施用し、追肥は行わなかった。剪定は原則として側枝 1 花止めで適宜行い、生育初期(5 節目まで)は摘果を行った。主枝仕立て本数と栽植距離の異なる区を 2 反復設け、ひも誘引で V 字仕立てとした。5 月下旬～12 月中旬まで収量を調査した。

【成果の概要】

- 1) 図 1 に栽植方法と上物収量(1a あたり)および上物率の関係を示した。上物率はいずれも 80%以上の高い値を示し、株間を広げても同等であった。同じ株間では、仕立て本数の多いものが高収量を示した。4 本仕立てでは株間が狭いほど収量が増加し、主枝 4 本仕立て、株間 30cm 区で最も収量が高くなった。ただし、株間は狭いほど栽植本数が増え、育苗の作業労力やコストが増大する点に留意が必要である。参考品種とした未熟果ピーマンでは 3 本仕立てのみ試験を行ったが、株間 30cm が適当であった。
- 2) 平均 1 果重は 4 本-30cm 区で最大となったが、ばらつきも大きかった(図 2)。
- 3) 同じ仕立て本数では、株間が広いほど「焼け」およびその症状が進行した「腐り」が多くなった。株間を広げることにより、生育は良好となるが、上段の果実が直射日光の影響が大きく、劣化したためと考えられる(図 3)。
- 4) 栽植方法による主枝間隔の差異と生育(平均節間長)の間には負の相関 ($R=-0.723$) がみられ、主枝間隔が狭くなるほど節間が徒長する傾向がみられた。ハウス内では、節間が短いほど収穫段数の増加が可能である。仕立て本数は株間に応じて、主枝間隔 15cm 以上が適当であった(図 4)。
- 5) 以上の結果より、無加温ハウスにおけるカラーピーマンの栽植方法は株間 30cm、主枝 4 本仕立てが上物収量を高めることから、最適である。

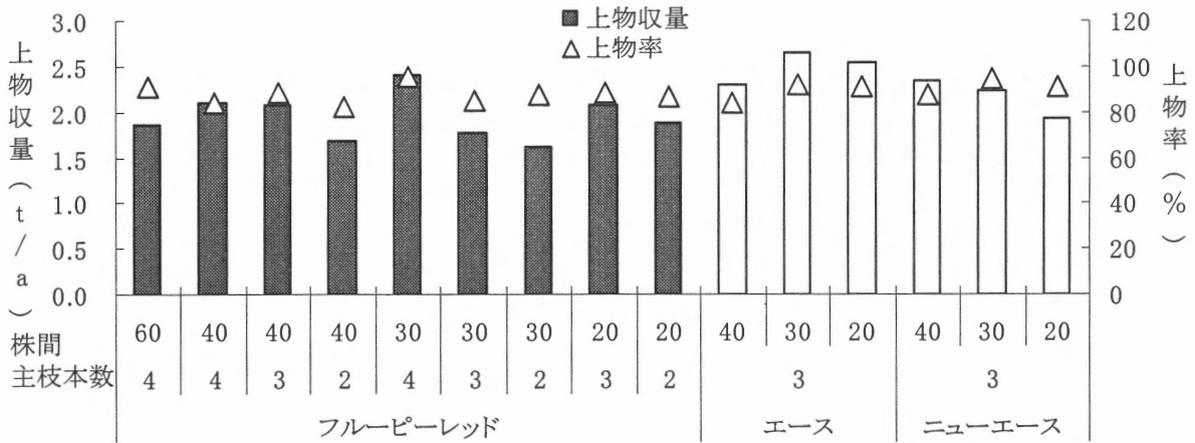


図1 栽植方法の異なるカラーピーマンの上物率および上物収量(1a当り)

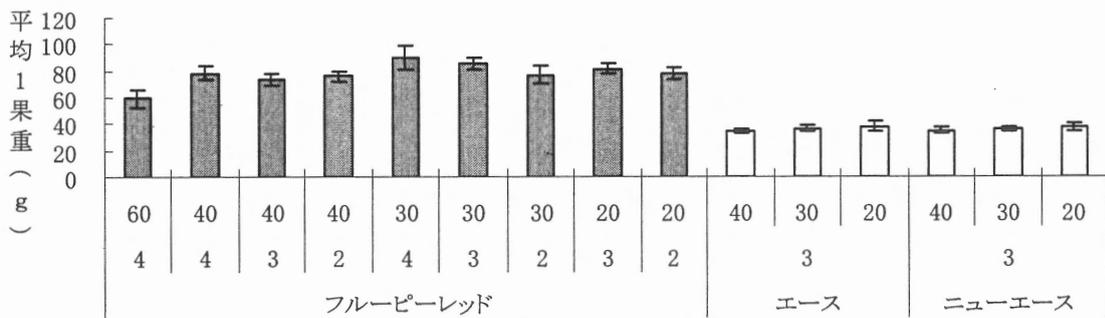


図2 カラーピーマンの栽植方法と平均1果重の関係

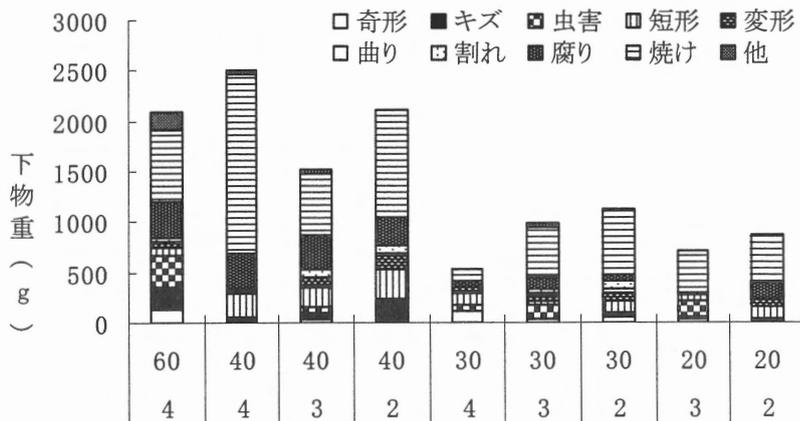


図3 カラーピーマンの栽植方法と下物内訳の関係

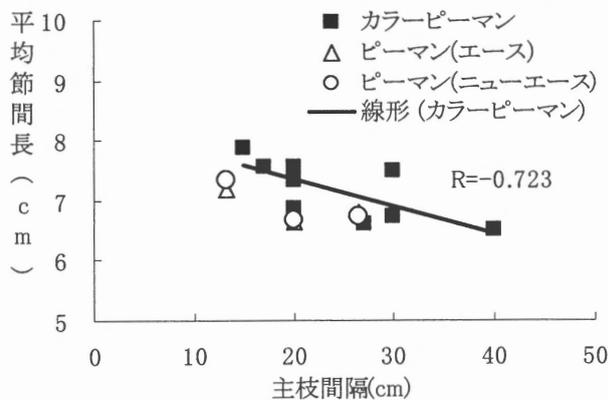


図4 主枝間隔と生育の関係